

地域の大学再創造と生涯学習教育研究センターの使命

著者	神田 嘉延
雑誌名	鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報
巻	1
ページ	1-3
別言語のタイトル	Creation of Local University and the Mission of Research and Education Center for Lifelong Learning
URL	http://hdl.handle.net/10232/19105

論

攷

地域の大学再創造と生涯学習教育研究センターの使命

鹿児島大学生涯学習教育研究センター長 神田 嘉延

国立大学法人と大学の 生涯学習的機能充実策

今日、大学に生涯学習ということから、青年学生だけではなく、多様な年齢層が学べる役割が求められている。中央教育審議会は、2002年2月に「大学等における社会人受入れの推進方策」の答申をした。地域における生涯学習機会の充実方策として、社会に開かれた大学の役割として社会人受け入れ施策を積極的に打ち出したのである。

国立大学法人法は、国立大学法人の業務内容の大枠を法的に規定されているが、ここでは、学生に対する修学や進路選択ばかりではなく、大学の社会の連携・貢献や生涯学習の役割が積極的に業務として規定されている。第22条の第3項「当該国立大学法人以外から委託を受け、又はこれと共同して行う研究の実施その他の当該国立大学法人以外の者と連携して教育研究活動を行うこと」、第4項「公開講座の開設その他の学生以外の者に対する学習機会を提供すること」、5項「当該国立大学における研究の成果を普及し、及びその活用を促進すること」。

象牙の塔から国民のための大学の創造という言葉は、1960年代後半の大学紛争のなかで盛んに使われたが、大学の研究の分業化・細分化は一層に進行し、国民のための大学としての教養教育や科学の側面から民主主義を支えていくという大学の役割は大きく後退していったように思える。むしろ、社会の動向に対して、大きく乖離しているようにも感じられる。現実の国民的課題に対して、正面から取り組む科学の創造ということは、身近にフィールドとしての教育研究の場があってこそ、より豊かに、自由に展開できるのではないかと考える。

鹿児島大学のフィールドサイエンスの 伝統的特徴

鹿児島大学は、県内全域をキャンパスという考えから、地方の特色を生かして、本キャンパスを離れての実習教育、調査・観察研究、サテライト教室などを実施してきた。鹿児島大学は、総合的にフィールドサイエンスの教育と研究を重視してきたのである。鹿児島大学の各学部の地域主義にこだわってきた歴史

の重みがフィールドサイエンスを発展させてきたのである。

法文学部と理学部の前進になった第7高等学校の初代校長であった岩崎行親は、晩年に大隅半島の福山に、旧制の私立中学の初代校長になり、全寮制のユニークな学校経営をした。僻地における人材の養成と優れた自然のなかからの人間教育をめざしたのである。

医学部は、建学精神のW・ウイリスの思想のもとに地域医療の伝統をもち、国際的視点からの地域や離島医療の教育・研究が展開されてきた。離島地域で活躍している医師を臨床教授として採用している。離島実習をカリキュラムのなかに位置づけて学生教育を実施している。さらに、与論島での海洋療法研究や離島農村地域の長寿の要因に関する研究などを実施している。

農学部は、玉利喜造を初代校長とした鹿児島高等農林学校の伝統のうえにつくられ、岩手大学農学部と共に地域の農民、地域の農業生産の発展のために様々な農法を地域のなかで定着させ、フィールド教育研究の蓄積をもってきた。

現在は、農学分野ばかりではなく、他の分野との協力による環境教育にも力点をもっている実践も試みられている。高隈演習林の施設をとおして、地域の教育機関や教育学部との共同による森の学校などを実施して、環境教育や自然生態系の科学教室などを実施している。また、農村調査実習として、学生のカリキュラムのなかで、農家経済、農産物市場、農村地域振興などのフィールド調査を実施している。農学部を中心に、全学の協力のもとに、網掛川流域の環境保全型農業の構築として、溝辺町竹子地域で、地域住民との共同による実践的な自然循環型農業の研究と教育に取り組んでいる。

理学部では、教育委員会、科学技術振興財団、青年会議所、新聞社等の共催や協力のもとに、青少年のための自然科学教室、地域青少年のための天文教室として、七夕祭り教室、入来八重山星座講座、コスモフェスタ教室、干潟の生き物教室等を学生の教育力向上も兼ねて実施している。これらの教育活動に、科学教育に関心をもつ多くの鹿児島大学の学生が参加している。理学部のカリキュラムとして、地学の巡検など長年のフィールド教育の蓄積がある。鹿児島大学は、自然と人間との関わりの中で発生するさまざまな社会的な問題に対して、地質学の立場から応える学問として応用地質学が発展し、環境問題の調査・研究・

解決に関する科学を構築し、地質災害の予知や防災・復旧方策の開発と人材養成に貢献してきたのである。さらに、与論や長島では、臨海フィールド教育と研が学生の参加のもとに実施されている。

教育学部は、鹿児島師範・女子師範・青年師範を継承し、地域生活と学校教育を積極的に結びつけた木下竹次などによる合科教育などをつくりだしてきた。地域の農業教育を推進していくために、鹿児島高等農林と鹿児島師範の協力関係は伝統的に存在していた。そして、地域生活に結びついた多くの教育者を世に送り出した。小原国芳もその1人である。現在は、地方教育実習、僻地・離島の観察実習(フレンドシップ事業)、僻地教育調査実習などを展開して、フィールド教育・研究を実施している。このなかで、学校教師や地域の教育関係者に積極的な協力をつくりだしている。

法文学部を中心にして、離島でのサテライト教室や全学的に南西諸島におけるガバナンス型地域政策の研究を学際的に実施している。学生とともに、地域農家の黒豚の林間放牧の実践的体験調査、地域の民俗調査、地域の方言調査、地域振興計画調査などのフィールド教育を実施している。屋久島では、鹿児島大学が中心となってゼロエミッションの地域環境保全型の地域総合振興計画の研究を実施している。

工学部では、地域とエネルギー研究や青少年の科学教室を生きる力などのキャリアデザインとの関係でのエネルギーの教室、精密微細加工室、精密電子部品等労働体験などの教育を実施している。エネルギー教育は、学校教育との連携を積極的に展開し、公開シンポジウムや教師教育にも積極的に関与している。また、学生が地域の青少年とともに、地域の企業の参加の協力のもとに実施していることが特徴である。

水産学部の海洋資源環境教育研究センターは、鹿児島湾や南西諸島に代表される地域の水産振興や環境保全を学際的に研究し、その成果を教育に反映している。地域の要請に応じて、環境問題や藻場造成に関する講演会への講師派遣している。

総合博物館では、フィールドミュージアムという理念のもとに伊仙町、始良町、指宿市、郡山町で具体的に発掘・採集した貴重な学術資料を地元で保存管理して展示していく方法の開発を地域との連携のもとにはじめている。

フィールドサイエンスは、鹿児島県内はもちろんのこと、広く、アジア・南太平洋に足をのばし、アジア・南太平洋との大学との姉妹関係を締結して、活動を展開している。このように、各学部や全学の研究組織などがフィールドサイエンスの理念に基づいて多面的な教育・研究を実施しているのが鹿児島大学の特徴である。

生涯学習としてのフィールドサイエンス

フィールド教育は、インターンシップの教育にも大いに力を発揮できる要素をもっている。地域住民と共に協力して実施するフィールド教育は、地域住民対象の公開講座にも有効に利用することができる。

鹿児島大学において、社会人を受け入施策を出していくうえで、フィールドサイエンスを大切に、大学の本来の教育と研究来と密接に絡んでいくことが必要である。それは、教育と研究と離れた大学の社会的サービス機能、地域貢献ということではなく、大学の学術の府としての社会的機能を発展させていくためのものである。また、地域の様々な課題発見に、住民の学習権を内容論的に深化したところで、教育と研究における住民参加が可能となる。科学の創造過程において、大学の公開講座・シンポジウム等をとおして、地域住民に、その目的や過程も理解され、地域住民と共に考え、地域住民の様々な研究支援活動についても、協力的対応ができるのである。地域住民の生涯学習と結合したフィールドサイエンスは、地域住民の参加による教育と研究の体制づくりであり、フィールドサイエンスの活動が地域の自立的発展にも貢献していく側面をもつ。それは、フィールドサイエンスが研究者のみの関心によって、進められていくことではないことを意味している。

フィールドサイエンスは教育と研究はもちろんのこと、地域貢献という側面をもち、新たに地域に根ざす大学づくりをめざすものである。生涯学習教育研究センターは、以上のように、鹿児島大学のフィールドサイエンス教育と研究実績の基盤うえに、地域の社会人の協力と支援のもとに、大学の生涯学習の役割を担っていく計画である。

大学の講義の市民への開放

鹿児島大学における生涯学習的機能は、地域住民の高度な学習要求を組織化しての役割をもつが、大学における生涯学習的機能は、大学の教育のあり方を含めて問題を提起していく考えである。大学内のキャンパス施設内の講義だけではなく、フィールドの授業が取り入れられることによって、出前の公開講座、サテライト教室などの条件が整備されていくのである。

さらに、フィールドサイエンスの成果は、その地域住民だけではなく、広く国民的に、または世界的に発信が気軽にできる時代になっている。パーソナルコンピュータという情報手段の急速な発達による e ラーニングの方法やテレビ会議システム

による大学の授業の方法も開発されていく課題がある。

生涯学習教育研究センターは、現在の青年学生を対象としている大学の講義を、可能なところから一般市民に開放して、社会人と共に学ぶ、講義の創造を全学的に提起している。社会人に開放された公開講義の形態は、青年学生の職業選択の判断にも影響を与えていく。そして、大学の講義が、青年学生だけからの評価ではなく、市民の学習要求の高度化のなかから、行われてことになる。勤労や人生の経験をもっている社会人と、青年学生の学習に対する姿勢が異なるのもやむをえない。その姿勢の違いからの講義の評価も大切である。

地域の自立発展と 民主主義のための生涯学習

民主主義にとって科学的判断力は大切であり、キャリア形成にとっての専門的な科学的な能力形成は不可欠な時代になっている。大学が地域民主主義のために貢献していくには、幅の広い大衆の生活と結合した総合文化的教養教育の場の提供が必要である。また、若者や社会人のキャリア形成や自立のための教育、ベンチャーへの挑戦、現実の社会の抱えている問題、地域問題などに対して、大学の学術の府としての役割が求められている。

地域の自立的発展のために、県・市町村行政、教育委員会、企業、協同組合、労働組合、NPO など様々な機関とのパートナーシップが大切と考えている。大学として、生涯学習を推進していくうえで、様々な機関とのパートナーシップが鍵になり、県・市町村との社会教育主事の専門職員や、それぞれの機関の生涯学習担当者との連携も不可欠になっている。

鹿児島大学の生涯学習教育研究センターは、当面、重点的に、地域の自立的発展のための生涯学習ということから、科学教育と環境教育を課題として探求していくが、鹿児島大学としての社会人の教育を受け入れていく具体的な施策や方法の開発についても生涯学習教育研究センターとして、全学的な協力を得て、推進していく計画である。この際に、フィールドサイエンスを大切にして、地域の自然や大衆の暮らしのなかからの生涯学習を鹿児島大学の特徴をもたせたいと思っている。4月から独立法人化によって、鹿児島大学の特徴が消えていくことのないように期待したい。